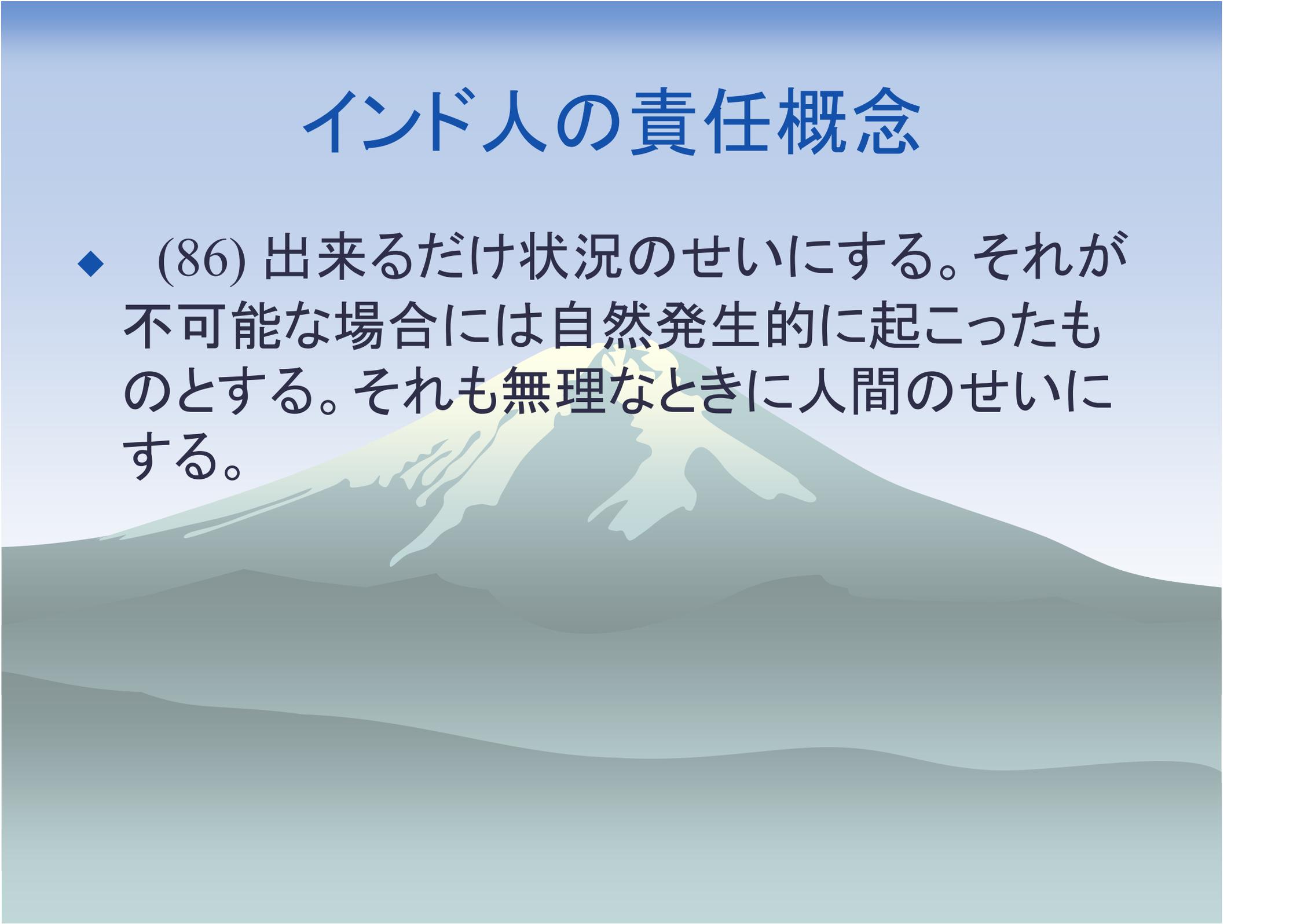


インド人の責任概念

- ◆ (86) 出来るだけ状況のせいにする。それが不可能な場合には自然発生的に起こったものとする。それも無理なときに人間のせいにする。



日本人の責任概念

- ◆ (87) 責任を認められるものを主語に他動詞を用いる。
- ◆ 制御不可能であっても自分の管理下にあるものに起こったことについては責任を持つべきである。
- ◆ 他動詞の主語は責任を負う人間が好まれる。
- ◆ 心理他動詞の主語についてはそのような心理状態を引き起こした状況のせいであり、そのような場合には無生物主語が許される。
- ◆ 動作主がある場合でも責任を追及する状況にない場合には(結果に焦点を当てたり、とっさの場合)自動詞を用いる。

英語圏での責任概念

- ◆ (88) 謝罪場面では狭い責任問題が意識されるので、他動詞の意味範囲が狭くなるが、
- ◆ 一般的には他動詞の主語は単に原因を示すのみであり、自動詞は自発的に出来事が発生したことを表し、動作主は存在しないことを原則とする。

結論

- ◆ 日本語と英語またマラーティー語のデータの精査により、暫定的に他動性の連続体を設定した。
- ◆ ところがマラーティー語における無生物主語が多く見られることによって連続体の仮説は破られる。
- ◆ そこで言語学的なモデルでは他動性の中身を検討することが出来ないということで、社会心理学における「意図性」と「責任」の概念の解明をもとに考察を重ね、文化によって責任の範囲が異なることを明らかにすることが出来た。
- ◆ 最終的には文化によって責任追及の方策が少し異なっていることを示した。

将来の展望

- ◆ 社会心理学的な手法を用いる研究が始まっている。
- ◆ プラシヤント・パルデシ、吉成祐子、鄭聖汝(2010)
「非意図的な出来事における他動詞使用と責任意識
—日本語・韓国語・マラーティー語の実態調査を通じて—」岸本秀樹編『ことばの対照』(くろしお出版)
- ◆ 今後は社会心理学者と言語学者の共同研究が伸展
することが見込まれる。
- ◆ 他動詞表現と責任意識の相関性および責任意識に
働く要因が明らかになることが期待される。